



2019年6月16日 歌舞伎鑑賞教室感想

儲 叶明 (中国)

筑波大学大学院 人文社会科学研究科 国際日本研究専攻
博士後期課程2年

学部の時日本語専攻で、日本に来て3年も経ったので、日本を代表する伝統芸能の歌舞伎については、当然何度も聞いたこと、調べたことはあるが、生で観るのは初めてだった。

今回劇場で歌舞伎を鑑賞するまでは、歌舞伎に対する印象は「敷居が高い」、「セリフが難しい」、「手が届かない」、「華麗なる一族」、「派手」といったステレオタイプのものだった。実際に鑑賞したところ、舞台の照明、仕掛け、衣裳、歌舞伎役者の素晴らしい演技など、初回の鑑賞にもかかわらず、意外と自分なりに満喫できた。

1. わかりやすさ

今回の鑑賞で感想はいろいろあったが、最初に一番強い印象を受けたのは「分かりやすさ」である。さすがに「歌舞伎教室」という名だけあって、お客さんに分かりやすく伝えるための工夫は肌で感じられた。例えば、「舞台の一部を上げ下げさせる昇降装置」である「セリ」を説明する前に、まず一度「上げ下げ、回転」するところを見せる。「黒衣（くろご）」を説明する時は、一回その役を登場させ、お客さんの好奇心を掻き立ててから説明を加える。衣裳変化を見せる時も、一度お化けの姿で現れ注目を集めてからやるなど、どれも非常に印象に残りやすい「見せ方」だった。

演劇が始まってからも、イヤホンの説明は、タイミングがよくてわかりやすい。概ね、「これから何が起るのか」、「これから起ることはどこが面白いのか」、「今目の前でやっていることはどこが見どころなのか」を巡って説明し、きちんとお客さんの目線から説明を加えるのが好印象だった。全体を通して、「説明の順番」、「見せ方」、「インパクト」などを一々意識し、工夫を凝らした説明の仕方だった。



2. 若者よ、こい！

「わかりやすさ」だけではなく、若い人にもちゃんと振り向いてくれるように、アベンジャーズの BGM、SNS への投稿タイム、ドッキリの仕掛け、配られたパンフレットの中の漫画など、若衆向けの要素がふんだんに織り込まれていることにも気が付いた。特に「歌舞伎は基本的にはエンターテインメントなので、面白かったら笑って、悲しくなったら泣いてください」という中村虎之介さんの一言が心に響いた。ソーシャルメディアが発達し、情報が今迄に未曾有の形で共有されている今の世の中では、歌舞伎だけではなく、日本の伝統芸能全般が危機感を感じているのだろうと思う。伝統芸能の従業者の多数の人は、恐らく「将来的には、どこへ向かうのか？」といった課題を抱えているのだろう。伝統芸術である「歌舞伎」を「エンターテインメント」に帰結してしまうのは、そのような危機感、責任感から由来したのだろうと思う。

それに、パンフレットで中村虎之介さん自らの紹介文には、「僕自身も小さい頃は歌舞伎が苦手だったんですよ（笑）」という文言が書いてあった。このような自己開示的な語り及び絵文字、「(笑)」の使用は、まさに今迄「高嶺の花」であった歌舞伎は、一般大衆、若者たちが等身大の姿でコミュニケーションを取ってくれるように、「しゃがんでコミュニケーションを取ろうとする」スタンスが見て取れる。若い世代に向かって一生懸命呼びかけている令和時代の歌舞伎の姿を、筆者が強く感じた。

3. プロ意識

もう一つ覚えたのは、歌舞伎俳優の「プロ精神」である。何より魅了させられたのは、歌舞伎俳優さんたちの「身体表現」である。お舟の「クドキ」のわざ、刀のつばを鳴らしながら店った「蜘蛛手蛸足」、お舟が恋人の義峰のために、負傷したにもかかわらず体を張って太鼓を打とうとした時の、「人形振り」の演出など、どれも印象的だった。瞬きすることを我慢すると同時に、非常に複雑で難易度の高い動作とセリフを、きちんと感情をこめて表現した役者さんの姿に感動した。

余談だが、私自身も、一度「能」の体験授業に参加したことがあり、「能」の舞台は「三間



四方」(5.4メートル)という構造で、本舞台の前に「きざはし」、左側に「橋掛かり」がある。本舞台の四角にある四つの柱も、それぞれ「笛柱」、「ワキ柱」、「シテ柱」、「角柱」という決まった名称がある。世界中、あらゆることがその舞台で表現することができる。「橋掛かり」がこの世界と別の世界を結ぶものであり、その向こう側は、死者の世界である。なお、「能」では、「すり足」という独特の歩き方がある、この独特な歩き方を実現させるには、足の重心の感覚、踵とつま先を意識して歩かなければならない。能では、小さな一歩でも歩くのに非常に時間がかかるのは、実は、体より心を遠くまで行かせることを表すためである。このように、舞台及び何の変哲もなく見える役者の動きの背後に、実は「能」の独特の世界観が広げられていた。

「能」と肩を並べ、日本を代表する伝統的な芸能である「歌舞伎」にも、恐らくそれに類似する拘りが、お客さんに気付かれていないうちに、全ての動きに忠実に反映されているのだろうと筆者が推測する。歌舞伎のような日本の伝統芸能は、ストーリー自体よりは、舞台、衣裳、役者さんの身体表現などを通して、独特の世界観を観客に伝えていると筆者が思う。このような、独特なセリフの言い方、身体の動き方、拍子など、様々な技法を大勢な人の前で手際よく駆使させるためには、舞台の裏側では普通の人では考えられないほどの、努力を積み重ねてきたことに違いない。例え見る側が分かってくれなくても、一つ一つの動きに抜けなく全力で丁寧に表現し、観客の「エンターテインメント」のためだけに務める姿にまた感心した。

また、歌舞伎の俳優さんだけではなく、顔を出さない黒衣、幕引きや揚幕、道具を作成、操る職人さんまで、劇場内/外にいるスタッフ全員が一丸になっていなければ、そもそも「歌舞伎」という舞台は、完成できない。私は今迄、数多くの日本人と接触してきたけれども、このような「プロ意識」、「プロとしてのプライド」は、実は馴染みのあるものであった。

4. 日本の伝統感

「歌舞伎」から少し視野を広げ、日本全体に対して「伝統」と「現代」が巧妙に融合されているイメージがある。修士課程の時に、研究室で日本人の友人とこのような会話もあった。

私「中国では伝統といえば、古い、安い、儲からないイメージは多少あるんだけど」
日本人の友人「や、日本で伝統といえば、高級だよ！」



確かに、「伝統」というキーワードに絞って日本中を見廻ると、高島屋、三越百貨店、歌舞伎、能、茶道、詩吟、俳句、落語など、どれも「上品」や「高級」と関連づけられそうなものである。2017年に開業した新しい商業施設のGINZA SIXでも、能楽堂など、伝統の要素をはめ込まれていた。しかし、昔の映画の中でも見られるように、昔、千利休が実際に使用した「茶室」は、実は非常に「質素」なものだった。

では、「伝統」はいかに「高級感」と結び付けられていたのか？私の考えでは、その答えは「伝統を現代に果敢に取り入れる」ところにある。住宅の設計（隈研吾）、服のデザイン（川久保玲、三宅一生など）、音楽（坂本龍一、椎名林檎）など様々な分野で「和」を活かせる日本人が活躍している。「和」は至るところに存在し、至るところでの融合が許容され、むしろ、期待されている。様々な分野での日本人のデザイナー、アーティスト、従業者の努力によって、日本において「伝統」は遠い昔の浮いた存在ではなく、様々な分野で自然に落とし込まれているものになっていると考える。



▲和風の建築

5. 京劇

中国の伝統芸能である「京劇」は1790年に発祥し、今年まで229年の歴史を持つ。400年以上の歴史を持つ歌舞伎ほど長くはないが、中国を代表する演劇として世界的にも認められている。歴史では最も有名な名家は「梅蘭芳」（ばいらんほう）が挙げられる。京劇の役柄は、「生」（男性の正義の役）、「旦」（女性の正義の役）、「浄」（性格が暴れん坊な男性）、「丑」（道化役）に分けられている。独特な「唱腔」（節回し）を持ち、身体表現も満ちている。



若者には馴染みがないのが日本の歌舞伎と同様であるが、京劇の役者の収入は、日本の歌舞伎役者に比べて大きな格差がある（月 20 万円前後）。中国で「京劇」といえば、日本で「歌舞伎」を聞いた時の「優雅」、「上品」、「華麗なる一族」のイメージはまず浮かんでこない。そのかわりに、「京劇」は、素晴らしい伝統芸能ではあるが、従事するのは険しい道であり、舞台上がって実際に演技できるまで、多大な苦勞と厳格な訓練に耐えきる必要がある、というイメージが強い。

私の個人の感覚では、「京劇」は、謡い方、身体表現、技術、様々な面において日本の「歌舞伎」には劣らないほどの伝統芸能であるが、日本社会のような、歌舞伎の役者を優先/優遇するシステム（名門小学校、中学校、大学の進学など）は中国にできていない。京劇の役者の中では厳しい収入と生活のプレッシャーに対処しながら、伝統芸能に対する情熱、根性だけで、京劇に従事している人が多い。一方、先述の事情により、京劇に従事しようとする若者は現在ますます減っていることも厳しい現状である。日本で歌舞伎が扱われているように、将来的に中国で京劇も同じように扱われることを強く望む。



▲京劇の戦いの場面



【歌舞伎語彙リスト】

▶「黒衣」(くろご)

舞台上で俳優の演技を補助する後見(こうけん)の一種であり、俳優が瞬時に衣裳や髪型を替えたり、道具を手にしたたり、不要になった道具は消したりする補助役である。芝居の中身や段取りを熟知し、一瞬を逃さず動作する。俳優の弟子が務める。

▶「揚幕」(あげまく)

舞台から見て花道の突き当りの鳥屋(とや)の入り口にかけられた幕。勢いよく開け閉めするとチャリンと音がする。その奥が鳥屋と呼ばれる小部屋である。

▶「花道」

舞台に向かって「左側」にあり、舞台と同じ高さで、客席を貫く通路である。

【歌舞伎の役柄】

立役：男役全般

女方：女性の役あるいはそれを勤める役者。現実の女性の模倣ではなく芸の上で作り上げられた理想の女性像と言われる。

子役：特徴的な甲高い調子のせりふと極めて典型的ないくつかの動作で成り立っている。

人間以外の役：動物の化身や花の精など人間ではないものである。

【その他】

▶変化する衣裳

仕掛けつきの衣裳を利用し、観衆の目の前で形や色を変えて見せることで、舞台を盛り上げる。

【参考文献】

用語は、全て歌舞伎用語案内 <http://enmokudb.kabuki.ne.jp/phraseology> より

松岡心平(1991) 『宴の身体』、岩波書店 三陽社出版

谷晃 (2007) 『茶人たちの日本文化史』 講談社現代新書

以上